

北伯

移住者の声



胡椒とアマゾン移民

北伯香川県人会会長 山本 陽三

「人間50年、化転のうちを較ぶれば
夢まぼろしの如くなり……」

信長の好んだ敦盛の一節ですが、真理ですね。本当に時のたつのは早いのもで、ブラジルに移住して“あっ”という間に半世紀が夢まぼろしの様に過ぎてしまいました。

1.コロノ時代

アマゾンのトメアスー植民地に入植したのは1954年(昭和29年)7月、私が19歳の時でした。我家の家族構成は父峰雄、母千枝の夫婦に長男の私を頭に子供たち5人の、7人家族でした。トメアスーは胡椒の産地で有名な村で、胡椒は黒ダイヤなどと貴重品扱いされ、世界市場は高値が高値を呼んで村中がわき立っていました。

我々新移民のコロノは旧移民のパトロンさんの農場で雇用農として働き、将来の独立の為に資金稼ぎをしながら、ピメンタ(コショウの一種)栽培の技術を見習う訳です。気候風土、食事等も違うギラギラ照りつけるアマゾンではありましたが、家族一同で一生懸命に働きました。マラリヤの洗礼も受け、暑さにも食べ物にも慣れて皆なで頑張るが、なかなか資金は溜まりません。胡椒値が高いために早く自分たちも植えたい、独立したいと思う様になっていきました。兎に角、経済的には勿論ですが我々コロノとパトロンさんたちの地位は天と地で、人にもよりましたが、それはそれは威張ったものでした。そういう植民地の風潮が武道家で元警察官の反骨精神おう盛な父はもとより、我々子供たちも一日も早く独立農として一本立ちしたいと決心させたもので、これは我々一家だけではなく、新移民全体にいえることでした。幸い我々のパトロンは話の分かる人でコロノ生活一年後に待望の独立農として開拓時代が始まる事となりました。

2.開拓時代

夢にまで見た独立でしたが、中々大変でした。耕地は小川に面して25町歩の再成林から原始林へと続く水捌けの良い傾斜地で、運よく胡椒樹には最適の土地でした。胡椒は植えて3年目から少し実がなり始め4年で成木です。3年間は収穫が無いので大変です。何としても実がなるまで食い繋ぐがねばなりません。資金が少ないので全て自分たちでやらねばならず家長の父は必死だったと思います。開拓は最初に小さな丸木の掘っ立て小屋を建て、伐採、山焼、抜根、整地と見よう見まねで段々と農場らしくなり、苦しい毎日ですがまた楽しみでもありました。バナナを植え野菜を作り魚を釣っての自給自足は、まるでロビンソン・クルーソーの様だと笑い合ったものでした。それでも若い食べ盛りの子供たちの食事に母がどれだけ苦労したかと、自分が子を持って初めて分かった事でした。開拓生活は貧しくて辛くて苦しい毎日ですが、それでも皆な元気で仲良く一家団結して乗り越え得たのは、厳しかったが尊敬できた父と大らかで優しく母のお陰だったと、山本家の基礎を作った亡き両親に感謝の気持ちでいっぱいです。

苦しかったが開拓時代は、また私の青春時代でもあった。若くて夢と希望に満ちていたのでどんな困難にもへこたれる事は無かった。何糞なにくそと、山中鹿之助が唱えた和歌を繰り返し唱えたものでした。

「憂き事のなおこの上に積れかし限りある身の力ためさん」

若くして気負った青春の甘酸っぱい思い出です。今でも目をつぶるとその一コマコマが懐かしく思い出されます。死んだ方がましだとさえ思った1ヶ月間も続いた重い胡椒の支柱運び、対岸に下ろした1500本の柱を高台の畑までサウバ蟻の様に毎日毎日みんなで担いだ事は今でもその後遺症として残った様で、難しい事業を始めるたびに考えるより行動に起こしてしまう癖となっています。また、父は人使いの荒い方で毎年正月あけの2日から陸稲の籾まきでした。野球も音楽もやらせてもらえず、人並みに働いてトラクターや冷蔵庫などが欲しいとは寝ぼけるなど言わんばかりの厳しい父でした。当時は腹も立ったものですが、自分が親となって子供たちを使うようになった現在、遊び盛りの生意気な子供たちを使って果たして自分には出来ただろうかと、あの厳しい開拓時代を乗り越えた父のすごさに対して、今さらに敬意を表しております。

3.農場拡張時代

胡椒の収穫が始まり、トメアス一産組に入会したのは新移民としては我家が第一号でした。組合番号85番、待望のトラクターに生産物を積んで組合に運ぶ我々は意気軒昂たるものでした。苦勞の甲斐あって農場はぐんぐん大きくなっていきま



胡椒の天日乾燥風景

した。水道整備、自家発電、冷蔵庫と生活は豊かになり、農場の機械設備も整って、トラクター、大型トラック、自家用車と年とともに段々と機動力も揃って来ました。子供たちもそれぞれ成長して、ブラジル語も上手になり、ブラジル人を使っての農場仕事になっていきました。第1目標の50トン収穫を達成した年に、ベレン郊外のカスタニヤール郡に第2農場を建設し、懸案のベレン進出をすることが出来ました。

開拓期には資金の関係で胡椒の新植も1千本単位でしたが、第2農場からは1万本単位となって仕事の方法も自分で働く百姓仕事から労働者を使っての農場経営へと変わっていき、如何に上手にブラジル人を使うかが、キーポイントになってきました。このころの我家の家族構成は私も、次男の拓男も結婚してそれぞれ家庭を持って独立していました。三男の雄三郎は、残念な事に開拓時代に亡くなっており、長女の美穂子は薬大生、次女のてい子が高校生で、父母が農業を引退して妹たちと一緒にベレン市に住んでいました。そして退屈しのぎに小さな雑貨店ヤンコールを開店していました。私は将来の商業界に進出する為の準備として他社に勤めて経験を積んでおりました。

ブラジルに移住し裸一貫からたたき上げて、一応ピメンタ農場主として成功した父は持論として、何時も事業の多角経営を私たちに教えておりました。このころからでしたが、胡椒収入を農業、商業、不動産にと三等分して分散投資を始め出しました。農場は次男の拓男が采配を振っていましたが、お陰さまで第3、第4と農場は増えていき、第2目標の100トン収穫も達成することが出来ました。拓男は引き続き農業の多角化にもり出し、牧場、デンデン椰子、アセローラ栽培等々と手を広げていきました。この様な破竹の勢いの我々にとって、まさか行手にイバラの道が待ちかまえていようとは、神ならぬ身に知る由もなく、前途洋々と繁栄の波にゆられていたのです。

4.農場衰退時代

何年ごろから胡椒に病気が出だしたのかは分かりませんが、トメアス一

植民地で少しずつ枯れていた事は知っていました。それでも大した被害でも無い様でしたのであまり気にもしていませんでした。しかし、移住者たちの農業形態が大型化するにつれて、年々病気の蔓延がひどくなってきて、恐れていた病気が我々の所にも発生したのは、カスタンヤールの第2農場で、100トン収穫からわずか2年後の事でした。

この病気はフザリウム菌による根腐病で、発生すると3年で、畑が全滅すると言われた怖い病気です。我々の主力農場で3万本の美しい緑の胡椒園が次々と茶褐色に枯れて、カサカサと音を立てて葉が落ちます。見るも無惨で見るに耐えず、ましてや愛情を持って育てた農場主は気も狂わんばかりの気持ちです。痩せ衰えた弟が夢に色が出る、緑の葉が茶色に変わると言い出したのはこのころでした。移住者たちは皆な必死で消毒しますが止まらずに次々と広がっていきます。農務局の技師やJICA派遣の先生方が研究しましたが、防止の決め手は無く、農家は病気を逃れて遠くへ離れて新植するしか仕方がありませんでした。

我が家も例外でなくその内に第3、第4と発病が続き、遠くに土地を探すしか生き残る方法はありませんでした。その上、この様な病気対策で四苦八苦の農家に追い打ちをかける様に打撃を与えたのが胡椒値の世界市場の下落でした。元々胡椒値は周期的に値が上下するのですが、泣き面に蜂でこの様な時に下落が続きました。往年のピメンタ村トメアスーも減産につぐ減産で植民地が逼塞していきました。枯れた胡椒園のあとには支柱が墓標の様に立ち並び荒涼としています。

「夏草や つわ者どもが 夢のあと」

このころから胡椒農家たちの長い苦難時代が続き、そして熱帯果実の生産地として甦るには数二十年の歳月が必要でありました。

5.商業時代

父母が、隠居仕事に始めたバスターミナルの雑貨店ヤンコールがバス交通の発展の波に乗り繁盛しだすと手に合わなくなり、私が手伝う事になりました。小さい会社ですが父が社長、母が副社長で私が専務に、次女のてい子が大学の会計科に通いながらの事務所手伝いをして、段々と成長していきました。このころ農業の方は胡椒の発病で大変な状態となり、長い苦難の時代が続くことになりました。それにしても胡椒景気が最盛期の時に胡椒収入を三等分して農業、商業、不動産へと多角経営に切り変えた父の先見の明には驚くばかりで、若し胡椒だけに再投資を繰り返していれば、どうなっていたかと背筋の寒い思いをした事でした。ヤンコール商会は今年で33年を迎えます。お陰さまで婦人服の専門店として7店舗を運営し、社員100名の中堅商店として、市民の御愛顧を頂いて居ります。亡父の後を継ぎ私が社長として頑張っていますが、これもひとえに亡き両親が異国で生きる子供たちの為に残した、移住責任者として果たした努力の賜と思って感謝致しております。

時は流れ孫たちも5人入社して初代の志を受け継ぎ、幹部候補生として後継者育成を受けています。各店舗には父母の写真が創立者として掛かって居り、「君たちのお手並み拝見」とばかり笑ってヤンコールの将来を見守っている様です。

移住して半世紀、私も人生の峠を越し亡父の年に段々と近づいて来ました。晩年の父が小さい孫の頭を撫でながら「お前たちにとって移住して良かったかなあ？」と呟いていた姿を思い出します。家長として移住した責任を考えていたのかも知れませんが、私も父と同じ様に年とともに食物の嗜好も変わってきて、コーヒーよりお茶、肉よりもお魚と日本食が欲しくなり、讃岐うどんがめっぽう恋しくなっています。移住してブラジル生活50年の人生に何の悔いもありませんが、日本人としての誇りを持って生きて来ただけに異国の土になる事に一抹の淋しさを感じます。息子たちも孫も私たち夫婦の日本民族の血が流れていても、ここ生まれのブラジル人です。ブラジルは、人種のるつぼと言われており、ポルトガル系、イタリア系、ドイツ系などの色々の国の移民から成り立っており、それぞれ特徴を持っています。考えてみれば私たち移民の目的は移住して成功し、財をなす経済面も必要ですが、優秀な日本民族の血を生かして行く精神面も大切と思っています。誇りを持たぬ民族は、国を亡ぼすとさえ言われています。私の子孫はブラジル人となり、段々と混血も進むことではしょうが、しかし大和民族の血が流れている事には間違いありません。正直で勤勉でまた思いやりのあるすばらしい日系ブラジル人として誇りを持って生きて行って欲しいと切

に願っております。

この事は我が家は勿論ですが県人会長として会員の子弟教育、また当地日系社会の二世、三世たちの後継者育成についても言える事で、私たち一世の務めと思っています。21世紀に入り、ブラジル移民も一つの節目を迎え、戦後移住50周年記念祭典の話も出ており、またこの度は母県にて香川県南米移住史の編纂が行われ、そしてアマゾンの日系社会も一世から二世への世代交代の時期を迎えています。この様な時こそ、私の第2の人生最後の務めではないかと心を奮い立たせております。